

ワケ カタチには理由がある(41)

～ノースアメリカン F-6D(P-51D 偵察機型)のスタンダ



【←同じく戦闘機改造の F-5F と】

本機は米国陸軍の傑作戦闘機 P-51D を偵察機として改造し、運用した機体です。外観上の違いは右側面の胴体後部に大小2つのカメラを、そして同部分の下面に1つのカメラを取り付けているのみで、注意して見ないと戦闘機型と区別できません。日本軍は偵察を重要視して 100 式司偵や彩雲といった偵察専用の機種を別途開発しましたが、米国や英国では、わずかな例外はあったものの、F-5(P-38 の偵察機型)、F-13(B-29 の偵察機型)、モスキート PR、スピットファイア PR など、既存の戦闘機や爆撃機を改造して偵察機として利用しました。日本軍は、戦闘機に格闘性能を求めましたから、高速性能に特化した偵察機を別途設計したのは必然だったのかもしれませんが、そもそも戦闘機に高速性を要求していた米国や英国の考え方の方がより合理的のように感じます。

【模型について】

タミヤ(Tamiya)1/72 インジェクションキットを、クイックブースト(Quick Boost)の F-6D 用改造パーツを使って改造したものです。また、キャノピーはクリアボックス(Clear vax)の塩ビ製のものに替えてあります。マーキングは太平洋戦争で使用されたもので、戦争の末期、沖縄を基地として日本に飛来した機体です。

(中川裕幸 2022 年 1 月)

